

## 事後評価報告書

R6年2月1日

研究種別	成長戦略課題	
研究課題名	施設栽培における難防除細菌性病害発生要因の解明と対策	
研究期間	R3年度～R5年度	
	評価項目	評価点
1	研究目標の達成度	4.0
[評価所見]		
<p>・試験1:トマトの栽培施設内において、かいよう病菌が高頻度で検出される場所を特定できたことは成果である。特に、養液を点滴するドリッパーやその流路が汚染されていることを究明できたことは、施設内の重点的に消毒すべき場所を明示した。また、ハサミや誘引ワイヤーなど栽培資材も汚染されていることが判明した。今後は、本課題の成果を元に、施設内の消毒手順や方法を分かりやすく示した衛生管理マニュアル等を作成し、営農者に提示するなどの普及活動に連携を期待したい。試験2:県内10地点におけるトマト葉かび病のレース実態を明らかにし、それらに対して効果的な殺菌剤も選定できた。トマト葉かび病は、各レースに対する抵抗性品種も開発されているので、それらと防除薬剤をうまく組み合わせた対策を講じるとともに、薬剤抵抗性の発達を未然に防ぐため、選定した5種類の薬剤を効果的に組み合わせたローテーション撒布のデザインを策定して頂きたい。総括:かいよう病と葉かび病の防除対策に効果的な情報を明らかにした。今後は、これらを元に幾つかの個別技術を巧みに組み合わせ、生産現場に即したシステムとして普及を目指して頂きたい。</p> <p>・トマトかいよう病発生要因として様々な経路を想定し調査を実施し、発生源を推定されており、成果が出ていると感じました。今後は本成果を県民に広く周知し活用していくことを期待します。</p> <p>・かいよう病菌の汚染資材別検出によるリスクが明確化されていた点が今後の対応に大きく期待される。特に、ドリッパーに注目できたこととコストも含めた消毒資材の結果が出せたことは、現場指導での活躍が期待できるものと感じます。深刻な病害であることから、今回の成果は大きな一歩と判断いたしました。今後として、菌の死滅温度と時間が確認できれば、作型スタート前まで、施設密閉高温状態にして、菌密度を少しでも軽減できる可能性があればと考えます。近年発生の多い葉かび病についても薬剤効果(耐性菌が進んでいる可能性)も、RACコードによる傾向が表れたことで薬剤選択にも活用が期待されます。また、天候不順が多い近年、曇雨天時の施設内湿度が95%を超える時間が増えることでの感染リスクも想定されます。有機物マルチなども夜間湿度コントロールの視点から有効的対策になってくるかもしれません。</p> <p>・トマトかいよう病、トマト葉かび病においても目標が達成されたと思われます。トマトかいよう病については、重要な消毒個所と消毒剤が分かったのは生産して行く上で有効な成果で、トマト葉かび病は、有効な薬剤が分かったことで被害が軽減できることは大変有効な成果でこれを基にした防除体系の確立が急務だと思われる。</p>		

## 事後評価報告書

R 6 年 2 月 1 日

研究種別	成長戦略課題	
研究課題名	県産主要鉢花における高温対策技術の確立	
研究期間	R 3 年度～R 5 年度	
	評価項目	評価点
1	研究目標の達成度	4.5
[評価所見]		
<p>・県内主力4品目の鉢植え花き類に発生する高温障害の原因を究明し、それぞれの品目ごとにその障害を回避するための具体的技術を見出した。それら対策技術は、各品目の栽培体系に応じた経営的にも合理的な技術で、コストや栽培条件にも適応することから現時点で即戦力となる技術が開発されたものと思われる。また、アッサムニオイザクラにおいては、高温対策の技術開発において発生する落蕾数の増加を抑えるための有効な新規技術も開発することができた。本課題で得られた結果を取りまとめ、想定を上回る4報の成果情報の発行にまで到達したことは高く評価されて然るべきである。今後は、本課題で得られた成果を花き生産農家に指導しやすいような普及活動(マニュアルの制作、技術講習会等)へと連携を図って頂きたい。また、幾つかの成果については新規課題へも連携し、県内の花き生産体制で生じている高温障害の克服に貢献し安定生産技術の開発へと発展させて頂きたい。</p> <p>・新たな遮光ネットが試験に取り入れられており、良好な成果が見られた点で高温対策を今後実施していく上で有効だと考えます。高温という言葉が多数使われていましたが、本試験でいう高温とは何度のことを示すのか?明確にされていると聞き手としては分かりやすかった。そのため、試験中の気温のモニタリングがあれば良かったと感じました。</p> <p>・地球温暖化に対応する生産現場の課題に対して、コスト、多岐に渡った品種での成果があがっていた点から多くの生産者に対して活躍出来る成果と感じます。栽培地の標高によって、昼夜温の条件差が想定されることから、施設内温度モニタリングをすることで品種ごと生育ステージごとの適正温度帯がより明確化されてくるかもしれません。ふじさんアジサイの着色を含め、光量確保の重要性や高透光・遮熱資材提案で新たに普及指導の一步が踏めることは大きな成果と感じます。最終的な出口として、トレードフェアなどで県ブランドフラワーの需要再確認も生産現場への成果活用結果として大きな鍵となると感じます。</p> <p>・各鉢花に対して目標が達成されたと思われる。最近の夏の猛暑での高温対策として高透光・遮熱資材の高い有効性は、散水灌水に抑制と有意義な研究で品目により最適の透光率、散水灌水時間等もあると思われるので、そういうデータもあるとより現場にあった技術の確立ができる。</p>		